

小学生の母親の学校への関わりに影響を及ぼす諸要因の検討

—— 母親への面接データを基にした仮説モデルの生成 ——

小 倉 正 義

(キーワード：母親の学校への関わり，小学校，仮説モデル)

I. 問題と目的

近年、学校と家庭がネットワークを形成し、チームを組んで子どもを援助するという考え方が広まり、さまざまな実践が行われ始めている。竹森(2002)は、スクールカウンセリングのなかで、生徒・学校・家庭のネットワークを作り出す包括的支援を行うことの重要性を説いている。また石隈(1999)は、援助チームを「援助ニーズの大きい子どもの学習面、心理・社会面、進路面、健康面における問題状況の解決をめざす複数の専門家と保護者によるチーム」と定義し、保護者の役割として子どものSOSやストレスに対応できることや子どものアセスメントを挙げている。この援助チームの理論をもとに、田村・石隈(2003;2007)は、保護者を含んだチームで援助することの有用性について実践的な検討を行っている。他にも、上村・石隈(2005;2006;2007;2008)によって、保護者面談における教師と保護者のコミュニケーションや連携に関する一連の研究が行われている。

以上のように、近年、子どもを援助するチームの一員として保護者を捉えた研究が体系的に行われている。そして、保護者を一員としてとらえるためには、保護者がどのように学校に関わるかという視点が重要である。保護者から教師・学校への関わりについての研究は、父母の教育権や学校教育への参加の正当性といった教育行政の観点からみた研究、転校生の母親の新環境適応の研究(小泉・江口, 2001)、保護者の学校への関わりを多面的に測定する尺度開発のための研究(小倉, 2007)、保護者の学校教育に対する多様な行動・意識について検討した研究(岩永ら, 2004;露口, 2007)など、近年様々な分野で行われ始めている。また、田村・石隈(2003)の実践研究では、援助チームの形成に保護者の状況が非常に強く影響を及ぼしていることが指摘されている。これらのことから、保護者の学校への関わりについての心理学研究を行うことの必要性は大きいと考えられる。

保護者の学校への関わり(Parent Involvement)に関する研究は、アメリカの教育学やコミュニティ心理学の分野で盛んに行われており、保護者の学校や子どもの教育への関わりが、学校における子どものレディネスや成功、登校、学習などと強い相関があることが示されている(Epstein & Dauber, 1991; Zellman & Waterman, 1998; Izzo, Weissberg, Kaspro, & Fendrich, 1999; Epsetin & Sheldon, 2002など)。

また、保護者の学校への関わりに及ぼす要因の検討もこれまで盛んに行われてきている。Grolnick, Benjet, Kurowski & Apostoleris (1997)は保護者の関わりレベルを予測する変数として、個人要因(individual factors)、社会的文脈(contextual factors)、制度的な要因(institutional factors)の大きく3つに整理している。個人要因(individual factors)は大きく「保護者の特性」と「子どもの特性」に分けられ、「保護者の特性」としては、学校への関わりや子どもの教育に対する信念(beliefs)や役割認知(role perception)、その役割に対する保護者の効力感(efficacy)などを挙げており、「子どもの特性」としては、性別や年齢などを挙げています。また、社会的文脈(contextual factors)としては、収入、家族構成などのデモグラフィックな(demographic)ものや援助資源の不十分さ(inadequacy of resources)を挙げており、制度的な要因(institutional factors)としては、学校の特性や学校長の態度、学校の保護者に対する態度などを挙げています。そして、これまで社会的文脈(contextual factors)の及ぼす影響を中心に様々な要因についての検討が行われている。

このように、これまでの研究のなかで保護者の学校への関わりに影響を及ぼす様々な要因が考えられ、検討されているにも関わらず、これらの要因がどのように作用しあって保護者の学校への関わりに影響を及ぼしているかを検討した研究は十分になされてこなかった。Hoover-Dempsey & Sandler (1997)のレビューで、保護者の学校への関わりに関する諸要因がまとめられ、階層的なモデルを提唱されているくらいである。子どもをチームとして援助することを考えたとき、保護者が関わる理由、あるいは関われない理由を一対一対応で考えるのではなく、より総合的・複合的にとらえることが必要である。

わが国と欧米では、社会文化的背景、教育行政や教育制度が大きく異なっており、保護者の学校への関わりについても海外の概念をそのままとり入れることは難しい。しかしながら、子どもを援助するために保護者と教師やスクールカウンセラーがチームを組むためには、保護者の学校への関わりに影響を及ぼす諸要因を多面的な視点から明らかにする必要がある。そのためには、わが国と欧米では保護者の学校への関わりに影響を及ぼす要因にどのような違いがあるのかに注意しながら仮説モデルを生成する必要がある。また、保護者の学校への実際の関わりと関わりたいという気持ちとの間に差があるという Eccles & Harold (1993) の指摘に基づき、保護者の学校への関わりとのモチベーションと実際の学校への関わりとの関係に注意して考察することで、より精緻化された仮説モデルが生成できると考えられる。

そこで本研究では、保護者の学校への関わりに影響を及ぼす要因が相互にどのように影響を及ぼしあい、それが実際の保護者の学校への関わりにどのようにつながるかの仮説モデルを生成することを目的とする。

そのため、内藤 (1997) が開発した Personal Attitude Construct (以下、PAC 分析とする) の技法を用いたインタビューを用いる。PAC 分析は自由連想を利用して態度やイメージの個人内構造を測定し、診断・分析する技法である。内藤 (1997) は PAC 分析の利点として、自由連想や被験者による解釈・イメージ報告を用いることによって、実験者のスキーマで被験者の独自性を排除することなくデータを聴取できるうえに、多変量解析によって析出された連想項目の束からなる構造を手がかり刺激としていることから、全体構造やメカニズムまで具体的にせまることができることを挙げている。これまで保護者の学校への関わりに影響を及ぼす要因を、総合的・複合的にとらえることはあまりなされてきておらず、個人内の意識構造を全体的にとらえることができる PAC 分析を用いることは有効であると考えられる。

調査対象としては小学生の母親を取り上げる。小学生の母親を対象とした理由は、学校段階に移行することで母親自身も子どもとの心理的な分離に伴う不安や心配など、子どもたちとの関係のなかで様々な問題を抱えることになると考えられ (岡堂, 1992), 小学校の初期の段階での保護者の学校や子どもの教育への関わりは、後の教育にも影響を及ぼすといわれているからである (Bitblatt, Beauty, Cronan & Ochoa, 2002)。

また性差や子どもに対する役割の違いを考慮すると、父親と母親では学校への関わりが質的に異なるので、本研究では対象を母親に限定した。

II. 方法

1. 調査対象

面接協力を個別に依頼し承諾を得ることができた、公立小学校の2年生から4年生の母親7名を対象とした。インフォーマントの平均年齢は35.4歳、標準偏差は3.9であった。子どもが複数いる場合は第一子についての回答を求めた。また、インフォーマントには、研究目的について説明し、研究協力についての同意の署名をもらっている。匿名性が保たれる範囲での調査対象の詳細について、表1に示した。以下、インフォーマント1～7を、それぞれ Info. 1～7と表記する。

2. PAC 分析の手続き

1) 自由連想と類似度の評定

連想刺激として、「子育てをしていく上で、あなたにとって子どもの学校について、また、学校と連携することについてどのようなイメージをもちますか?あるいは、どのような言葉が思い浮かびますか?」という教示を口頭で与えた。この教示で思い浮かんだイメージや言葉を、思い浮かんだ順に縦3cm、横9cmの大きさのカードに、思い浮かばなくなるまで記入してもらった。ここで、思い浮かんだイメージ・言葉の順番を想起順位とした。

次に、「今度は言葉の意味やイメージがプラスであるかマイナスであるかの方向ではなく、あなたにとって重要と感じられる順にカードを並び替えてください」と教示し、想起順位と重要順位の一覧表を作成した。

さらに項目間の類似距離行列を作成するために、ランダムにカードの対を選びながら、以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて類似度を評定させた。「あなた自身が子どもの学校について、また学校と連携することに關してあげたイメージや言葉の組み合わせが、言葉の意味ではなく、直感的なイメージの上でどの程度似ているかを判断し、その近さの程度を下記の尺度の該当する記号で答えてください」と教示し、評定尺度は以下の尺度が印刷された用紙を提示した。

表 1. インフォーマントの基礎データ

	Info. 1	Info. 2	Info. 3	Info. 4
年齢	30代半ば	30代後半	30代半ば	30代前半
仕事形態	主婦	主婦	主婦	非常勤
子どもの学年	小学2年生	小学2年生	小学3年生	小学2年生
子どもの性別	女	女	男	男
家族構成	本人・夫・子ども2人の4人家族	本人・夫・子どもの3人家族	本人・夫・子ども・祖母の4人家族	本人・子どもの2人家族
連想項目数	6	5	9	8

	Info. 5	Info. 6	Info. 7
年齢	40代前半	30代前半	30代後半
仕事形態	常勤	常勤	非常勤
子どもの学年	小学3年生	小学2年生	小学4年生
子どもの性別	女	男	女
家族構成	本人・子どもの2人家族	本人・夫・子ども2人の4人家族	本人・夫・子ども2人の4人家族
連想項目数	5	5	8

- 非常に近い……………A
- かなり近い……………B
- いくぶんか近い……………C
- どちらともいえない……………D
- いくぶんか遠い……………E
- かなり遠い……………F
- 非常に遠い……………G

2) クラスタ分析

上記の類似度評定のうち、同じ項目の組み合わせは0、Aは1、Bは2、Cは3というように、0から7点までの得点を与えることで作成された類似度距離行列に基づき、ウォード（Ward）法によるクラスタ分析を施した。

3) インフォーマントによる解釈の方法

析出されたデンドログラムの余白部分に連想項目の内容を記入し、これをコピーして1部はインフォーマントに呈示し、もう1部は実験者が見ながら、以下の手順でインフォーマントの解釈や新たに生じたイメージについて質問した。

まず、実験者がまとまりをもつクラスタとして解釈できそうな群ごとに項目を読み上げ、項目群全体に共通するイメージや項目が併合された理由、群全体が意味する内容の解釈について質問した。これを繰り返して全ての群が終了した後、クラスタ間を比較させてイメージや解釈の異同を報告させた。この後さらに全体についてのイメージや解釈について質問した。続いて、実験者の解釈しにくい個々の項目を取り上げて、個別のイメージや併合された理由について補足的に質問した。最後に、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない、のいずれに該当するかを回答させた。

3. 質問紙の構成

家族構成、収入、子どもの学年、性別、年齢、気にかかること・心配なこと、実際の学校への関わりの内容、

関わる理由を尋ねた。

4. 調査時期と面接の手続き

X年6月からX年7月に2回に分けて実施された。1回目の面接ではPAC分析の自由連想と類似度の評定をさせ、その後質問紙で回答を求めた。2回目の面接では残りのPAC分析の手続きをし、面接終了後に全体の感想を聴取した。

Ⅲ. 結果

どのインフォーマントも学校への関わりを、自分が直接学校に関わることをイメージして回答をしていた。そこで本研究では保護者の学校への関わりを「学校への直接的な関わり」に限定する。

以下にInfo. 1～Info. 7のPAC分析の概要を示し、表2に自由連想段階の連想項目、想起順位、重要順位を示す。Info. 1に関しては、クラスター分析の結果を図1に、そのクラスターの命名やその解釈の過程を文中に代表例として記す。「」部分はインフォーマントの語りの引用であり、()は筆者による補足である。

1) Info. 1の事例

クラスター1は「学校と家庭の双方の言い分を分かり合える」「親の安心感」「密にしたいと願う気持ち」の3項目であった。親の安心のためにも学校への理解が必要で、学校と関わり、親の言い分を発言する場所がほしいという母親の気持ちを表現したクラスターであると考えられ、＜学校への関わり願ひ＞と命名された。クラスター2は「大

表2. インフォーマントの連想項目一覧

想起順	内容	重要順
Info. 1の連想項目一覧		
①	大切なもの	①
②	不可欠なもの	②
③	少し遠い	③
④	親の安心感	⑤
⑤	密にしていきたいと願う気持ち	⑥
⑥	学校と家庭の双方の言い分を分かり合える	④
Info. 2の連想項目一覧		
①	教育する場	③
②	社会性を身につける第一歩	①
③	差別	④
④	競争	⑤
⑤	個を育成していく場	②
Info. 3の連想項目一覧		
①	親の意見が通じてない気がします	①
②	不満	⑥
③	よくわかりません	⑨
④	成績・態度をどんなふうに見られているか	⑦
⑤	あつい	⑧
⑥	一部の方で動いている	⑤
⑦	危機管理はどのようなのでしょうか？	④
⑧	連絡が遅い	②
⑨	お話しする機会がないです	③
Info. 4の連想項目一覧		
①	楽しく	④
②	大変	⑤
③	無難に	③
④	なかよく	⑦
⑤	体質が古い	⑧
⑥	子どもにとって多くを学ぶ場	②
⑦	保護者も先生も負担が大きい？	⑥
⑧	和が大切	①
Info. 5の連想項目一覧		
①	近くてとても遠い	④
②	疎遠	⑤
③	安心している部分と不安な部分がある	③
④	学校に対する信頼度ではなく、先生個人に対する信頼度	②
⑤	仕事をしているので、学校と関わる時間がない	①
Info. 6の連想項目一覧		
①	必要不可欠	④
②	信頼	①
③	緊密	③
④	連絡不足	⑤
⑤	先生が子どもに対して関心がないと感じる	②
Info. 7の連想項目一覧		
①	とても大切なこと	⑧
②	実際は難しい	③
③	教師もいろいろな人がいて連携に前向きな人とそうではない人がいる	④
④	個人懇談会や家庭訪問、連絡帳でコミュニケーションをとる	①
⑤	親にもいろいろな人がいる（連携のモチベーションは様々）	⑤
⑥	学校と地域社会の連携も必要	⑦
⑦	PTA	⑥
⑧	一緒に子どもの安全を守る	②

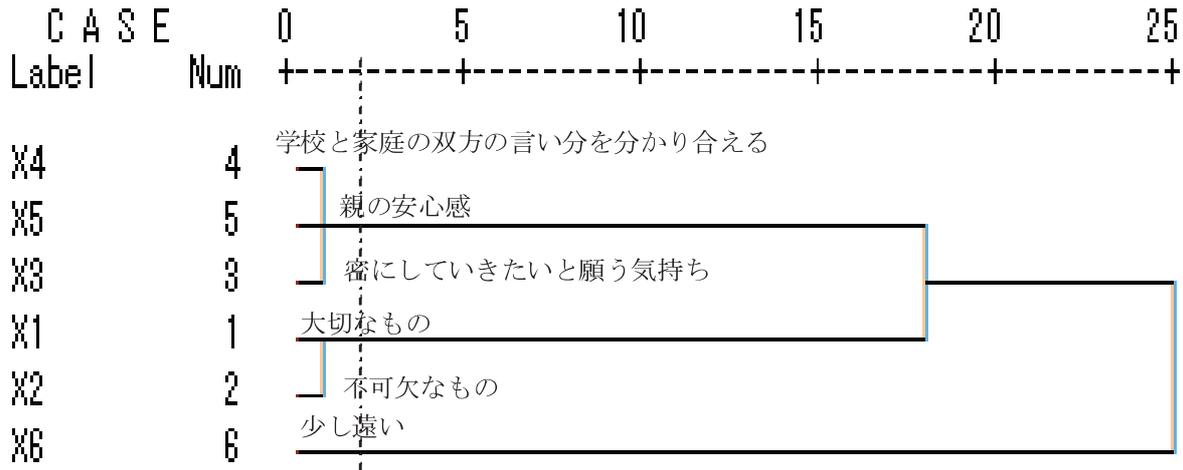


図1. Info. 1のクラスター分析結果

切なもの」「不可欠なもの」の2項目であった。学校と連携することが必要であることを繰り返し語っており、このクラスターは「連携の必要性」と命名された。Info. 1自身も「漠然としている」と語るように、願いというより、「連携するべきである」という信念であると考えられる。Info. 1は「連携の必要性」というクラスターに示されるような信念を強くもっており、それが「学校への関わりの願い」という強いモチベーションにつながっている。実際に学校で読み聞かせのボランティアを他の保護者と協力して実現させるなど、その高いモチベーションからコストも厭わずに積極的に関わっている。一方で学校との関わりがなかで、学校の配慮の不十分さなどを感じ、学校に対して「少し遠い」という印象を抱いている。「少し遠い」のが現実と思いながら、現実と理想とのギャップを少しでも埋めようと努力している。連想項目の単独でのイメージもプラスが多く、学校への関わりに対して積極的であることがうかがわれた。

2) Info. 2の事例

「学習への期待」「個の育成への期待」の2つのクラスターが析出された。学校への直接的な関わりをイメージしたというよりは、子どもを通して見た学校のイメージを連想したと考えられる。連想項目の単独でのイメージはすべてプラスであることから、子どもの成長を考える上で学校を肯定的なものとしてとらえていると考えられた。また、自分の「私もそういう個を形成されてきたのかもしれない」と自分のパーソナリティや子育て観が教師を見る目に影響していることに対する気づきを語った。

3) Info. 3の事例

「評価への不可解さ」「連絡の遅さ」「学校への不満」という3つのクラスターが析出された。全体としてネガティブなイメージである。Info. 3は子どもの学習に敏感であり、「評価への不可解さ」「連絡の遅さ」が教師への不信につながっていると考えられた。学校に関わる機会が与えられないことや幼稚園のときに他の保護者との間でトラブルがあったことから、「自分から関わろうと思うが、(関わらないのには)それなりの理由がある」と自らが学校に関れない理由を語った。

4) Info. 4の事例

「連携の大変さ」「学校・保護者・子どもの和」「楽しく学べる場に」との願いの3つのクラスターが析出された。学校が熱心なことで「連携への大変さ」を感じながらも、「なんとかうまくやっていくために」「子どものために」学校から要請されたことはできるだけするようにしているが、周りのサポートのなさや仕事の忙しさで大変さをどうしても感じてしまうということ、父親がいないこともあって他の保護者の目が厳しいことを語った。その一方で「まあ子どもが元気に楽しく行ってくればいいかな」と大変さを抱えながらも子どもが適応的であれば、学校に関わっているなかで楽しみを見つけ、関わっていることの意味も感じていた。

5) Info. 5の事例

「学校への関われなさ」「学校への関わりの基準」の2つのクラスターが析出された。「仕事が生活を支えて

いくために必要であり、どうしても時間がなくていけない」と経済的・時間的余裕のなさを訴えた。クラスターの解釈の最初の頃はその訴えが主であったが、面接が進むと「仕事がしなくても生活が大丈夫だったり、担任の先生に不安があったりすれば、いくらでも学校に関わる」と学校への関わりの意志が語られた。

6) Info. 6 の事例

〈信頼関係の必要性〉〈連絡や気配りの不十分さ〉の2つのクラスターが析出された。「先生が信頼できないと、それは不信になってしまう」と信頼関係の重要性を指摘した。そして、教師の〈連絡や気配りの不十分さ〉が原因で教師に不信を抱くようになり、学校と距離をおくようになったエピソードが話された。面接終了後には、「今回こうやって話していて、いかに自分もきちんと（先生に）言っていないかということがわかりました。今度の懇談会でこちらの要望を伝えます」との気づきがあった。

7) Info. 7 の事例

〈連携の必要性〉〈連携の難しさ〉の2つのクラスターが析出された。学校と家庭の連携は子どもの安全、成長・発達を見守るために一般的には必要で大事であるという考えをもたれており、その上で「一個人としてはすごく難しい」と話された。学校と家庭の連携が難しい理由としては、教師にも保護者にもいろいろな人がいることを挙げていた。また、子どもが年齢的に大きくなってくると秘密にしていることも多くあるので、子どもの様子を「ダイレクトに先生に聞く部分もほしい」とのことであった。現在の担任には不信感を抱いていて、少し距離をとってしまっているという気づきがあった。

IV. 考 察

1. 母親の学校への関わりに影響を及ぼす諸要因

PAC分析の結果から、インフォーマントの個人内で学校に関わることについての態度が、どのような要素で構成されているかを明らかにしてきた。

ここで個別の分析で浮かび上がってきたクラスターと面接内容を先行研究と併せて、実際の母親の学校への関わりに影響を及ぼす要因になり得る要素として整理し直した結果、以下の7つのカテゴリーがあると考えられた。そのカテゴリーとは、「コスト-ベネフィット評価」、「母親の状況」、「子どもの要因」、「母親の態度」、「学校の風土」、「他の保護者との関係」、「教師の対応」である。

それぞれのカテゴリーの定義と内容を示し、それぞれのカテゴリーが母親の学校への関わりへのモチベーションや実際の母親の学校への関わりにどのような影響を及ぼしているかについて考察する。

1) コスト-ベネフィット評価

安藤・広瀬 (1999)⁽²³⁾の定義を参考に保護者が学校と関わることによって自分自身にとって望ましい結果がもたらせることという判断をベネフィット評価、どのくらいの大変さがあるかという判断をコスト評価と定義した。Info. 1はベネフィットだけに言及しているが、コストを感じていないのではなく、コストとベネフィットを評価した結果、ベネフィットのほうを強く感じているのであると考えられる。「関わってみないとわからないものがある」という言葉がそれを象徴しており、Info. 1のモチベーションの高さが、その判断に影響を及ぼしていると仮定できる。逆にInfo. 3は過去のネガティブな経験からベネフィット評価よりもコスト評価のほうが高くなっており、学校に関わりにくくなっている現状について言及している。またInfo. 4がコストについて言及しているにも関わらず学校に関わっている。これは、「大変」「保護者も先生も負担が大きい?」といったコスト評価の連想項目の重要順位が低く、コスト評価が実際の行動に影響を及ぼすほど高くなかったからであると考えられる。安藤・広瀬 (1999)⁽²⁴⁾は、ボランティア活動に対する活動継続意図（活動を継続する意図）、積極的活動意図（組織に積極的に貢献したいという意図）に影響する要因を検討し、コスト評価が継続意図に影響することを明らかにしている。母親の学校への関わりにおいても、コスト-ベネフィット評価が実際の学校への関わりに影響を及ぼす重要な要因になっているといえる。

2) 母親の状況

このカテゴリーは、家族構成、仕事の形態、周囲のサポートの状況など、その母親が関わることのできる状況

であるかを示す。Info. 4, Info. 5は、単身で子育てをしていて周囲のサポートも少なく、仕事も忙しいことを学校に関わることができない理由として語っている。仕事をしている4人のインフォーマントのうち3名は忙しさについて言及している。ここで挙げられている要因はGrolnick et al (1997)のデモグラフィックな要因や、援助資源の不十分さを含む社会的文脈の概念と類似するものであり、保護者の学校への関わりへの重要な要因である。その他にも家族構成、保護者の言葉の問題(教師とコミュニケーションできるかどうか)や母親の抑うつ、教育レベルなどが保護者の学校への関わりと影響を及ぼしていることがこれまでの研究で明らかになっている(Bitblatt et al, 2002; Kohl, Lengua & McMahon, 2000)。これらの要因も保護者の措かれている状況を示したものであり、このカテゴリーに含まれると考えられる。Info. 5は経済的な余裕のなさにも触れ、学校や子どもに関わりたくても関われない状況にあることを語っている。このことからある一定程度の心理的・経済的・時間的に余裕のある状況が確保されないと、モチベーションのあるなしに関わらず、母親の学校への関わりは難しくなると考えられる。

3) 子どもの要因

このカテゴリーは、子どもの学年や適応などである。ここで挙げられている要因は、Grolnick et al (1997)が挙げている個人要因の「子どもの特性」に含まれるものである。Info. 4が「子どもが学校に楽しく行っているぶんには関わられる」と語っていること、Info. 7が高学年になると子どもが秘密にすることも多くなるので「先生にダイレクトに聞く部分もほしい」と語っていることから子どもの要因は母親が学校と関わるうえで重要な要素であり、母親のモチベーションへの影響が考えられる。Info. 3のように子どもの学習への評価が教師への不信につながり、教師への不信から学校への関わりモチベーションの低下が見られる例もあり、子どもの要因が後に述べる教師の対応を媒介し母親の学校への関わりモチベーションに間接的に影響することも考えられる。

4) 母親の態度

このカテゴリーは、学校への関わりに対する信念や効力感のことである。ここで挙げられている要因は、Grolnick et al (1997)が挙げている個人要因の「保護者の特性」に含まれるものである。Info. 1では重要項目の一番目に「大切なもの」、二番目に「不可欠なもの」を挙げているように「学校への関わりは必要である」という信念が強く、学校に関わることの効力感も感じている。そのような学校への関わりに対する強い信念や効力感が高いモチベーションにつながっていると考えられた。Info. 6も「必要不可欠」、Info. 7も「とても大切なこと」が連想項目として挙げており同様の信念を持つと考えられるが、当該項目の重要順位が低く行動に及ぼしている影響も少ないと考えられる。

5) 学校の風土

このカテゴリーは、母親の学校への関わりに対する学校や地域の風土のことである。ここで挙げられている要因は、Bitblatt et al (2002)⁽³⁰⁾が保護者の学校への関わりに影響を及ぼしている要因としてあげているFamiliarity(地域の雰囲気として、学校に参加する雰囲気かどうか)に含まれるものである。Info. 4は保護者の参加を求める学校の風土のなかで、「大変さ」(コスト)を感じながら、そのなかで学校に関わることのベネフィットを感じ、実際の関わりにもつながっている。「学校の風土」から母親が学校に関わるのは外発的なモチベーションであるが、学校と関わるなかでコストよりもベネフィットを感じ効力感をもつことができれば、内発的なモチベーションにつながると考えられる。

6) 他の保護者との関係

このカテゴリーは、他の保護者との関係性の問題やそこから生じる規範的な影響のことである。関係性の問題とは他の保護者との関係や関係のなかで生じるストレスなどを示し、規範的な影響とは他の保護者からどのような役割を期待されているかを示すものである。Info. 1が他の保護者と一緒に読み聞かせボランティアを実践していること、Info. 3が過去の経験から保護者との関係性の点でモチベーションが低くなっていること、Info. 4が保護者と関わるなかで楽しいこともあると語っていることなど、保護者との関係がモチベーションに影響しているといえる。またInfo. 4にとっては父親がいないことで他の保護者の目が厳しいという意識があり、その規範的影響から「無難に」行動している。このカテゴリーは諸外国の研究には見られない要因であるが、Markus

& Kitayama (1991) が日本人にとっての他者との関係の重要性を指摘しているように、わが国では母親の学校への関わりに大きな影響を及ぼしていると考えられる。

7) 教師の対応

これは母親の学校との関わりの中で教師の母親への対応のことである。本研究ではすべてのインフォーマントから教師への不信や不満が語られ、関わりへのモチベーションに負の影響を与えていることがうかがわれた。特に Info. 3 と Info. 6 では、連想項目に教師の対応への不信や不満がみられ、学校への関わりへの影響も言及されている。先行研究でも教師の教育歴や教師の効力感 (Hoover-Dempsey, Bassler & Brissie, 1987) や学校の保護者への対応が参加しやすい雰囲気かどうか (Bitblatt et al, 2002) などが保護者の学校への関わりに影響するとされている。

2. 母親の学校への関わりに至るまでの仮説モデル

前述したカテゴリーに加え、学校への関わりへのモチベーションと実際に関わりを含めてその関係を整理すると、図2のような仮説モデルが生成された。

Eccles & Harold (1993) の保護者の学校への実際に関わりと関わりたいという気持ちとの間に差があるという指摘に関して、この仮説モデルから3つのことが考えられる。1つ目は、モチベーションと実際の行動の間にコストベネフィット評価という過程が存在していること、2つ目は、母親が学校に関わることのできる余裕を持てるような状況でないとモチベーションの高低に関わらず母親の学校への関わりは難しくなること、3つ目は、学校の風土が母親の学校への関わりを許す雰囲気であるかどうかということである。そして、Info. 7 が連想項目に挙げているように「連携のモチベーションも様々」であり、その背景にはモデルに示しているような個人要因や関わりを許さない母親の状況が隠されている可能性がある。このため、教師やスクールカウンセラーは母親に関わる時、その背景にあるものを考慮しながら関わりが求められるであろう。母親の背景にあるものを考慮に入れなければ、母親の学校への関わりへのモチベーションを低め、子どもを援助するためのチームを築くことも難しくなると考えられる。

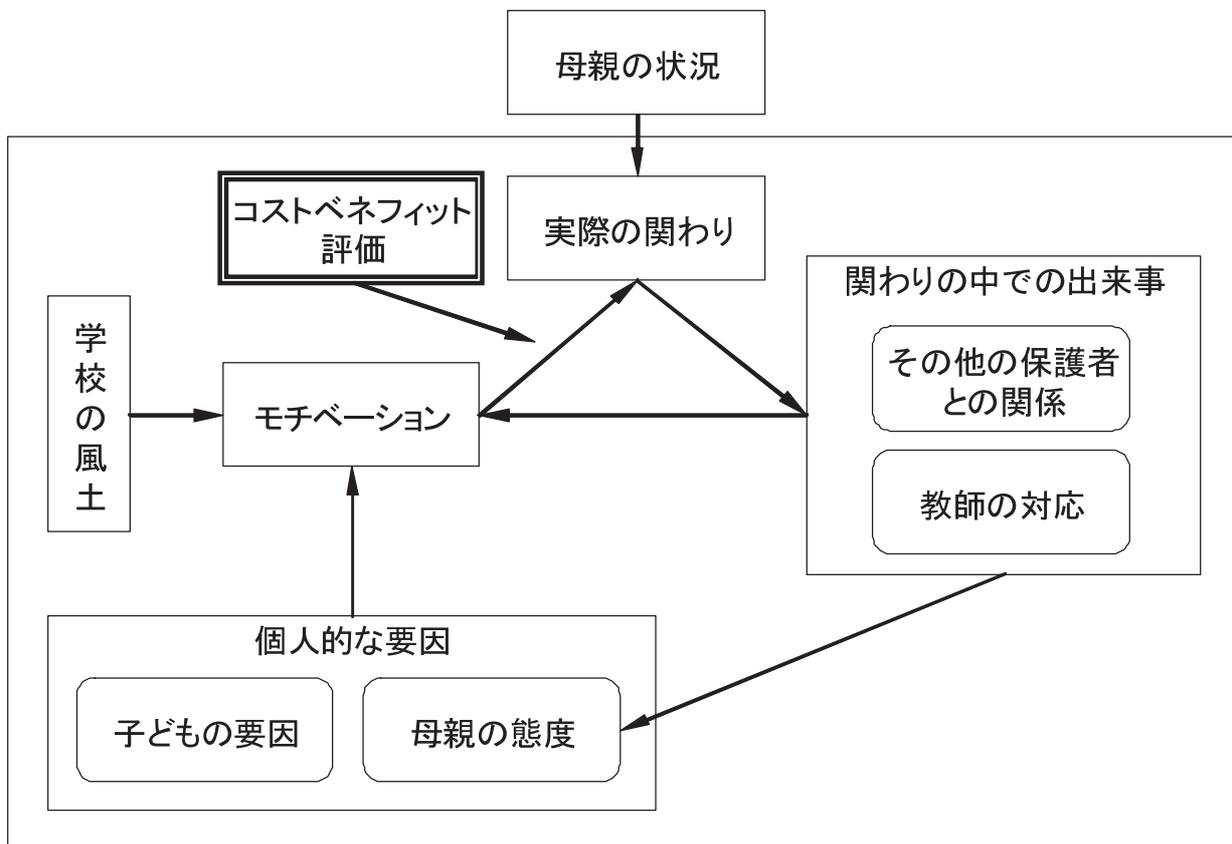


図2. 母親の学校への関わりに影響を及ぼす仮説モデル

また本研究で PAC 分析の技法を使った面接をすることが、インフォーマント自身の態度への気づきや明確化につながることを示唆された。Info. 2 は自分のパーソナリティや子育て観が教師をみる目に影響していることに対する気づきを語り、Info. 6 は「今回こうやって話していて、いかに自分もきちんと（先生に）言っていないかということがわかりました。今度学級懇談会で先生に伝えてみます」と自分の態度への気づきを報告している。PAC 分析の技法を考案した内藤（1997）が、PAC 分析を繰り返し続けることで「クライアントは、自らが知っている以上のものを捉えている」という意味を実感するようになったと述べていることとつながる部分であると考えられる。このように本人が学校や学校との関わりに対する自分の態度構造を分析することで、どうして自分が教師に対して不信を抱いているのか、どうして学校に関わることができずにいるのかということが気づきを生み、Info. 6 のように学校への関わりに対するモチベーションに結びつけることもできると考えられる。仮説モデルの「モチベーション→実際の関わり→関わりの中での出来事」の循環のなかで悪循環が起っていたとしても、このような気づきが悪循環を断つことにつながる可能性が考えられる。PAC 分析の実施は、時間的なコストが大きいですが、これを応用した保護者用のプログラムの開発と実践が期待される。

3. 今後の展望と本研究の課題

これまで保護者の学校への関わりに影響を及ぼす要因については検討されながらも、多面的にその要因をとらえたモデルの生成は行われてこなかった。その意味で、本研究で仮説モデルを生成したことの意義は大きい。ただし本研究の対象は7名という少人数であり、解釈方法も恣意性があることは否定できない。そのため、本研究で生成された仮説モデルを一般化することは慎重になる必要がある。

今後、本研究で生成された仮説モデルをきっかけにして、さらに精緻化したモデル生成、またモデル検証のための研究がすすめられることが必要とされる。また、臨床的な妥当性を検討するためには、スクールカウンセリングなどのなかで、この研究に基づいた実践が行うことが必要であろう。さらに本研究は母親のみを対象としたので、父親の学校への関わりに影響を及ぼす要因についても検討することも望まれる。

—— 謝辞 ——

面接調査にご協力いただいた母親の皆様へ深く感謝しております。また、本論文を執筆するにあたりご指導いただいた名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 平石賢二先生に、この場を借りて御礼を申し上げます。

—— 文献 ——

- 安藤香織・広瀬幸雄「環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因」『社会心理学研究』, 15, pp.90-99, 1999.
- Bitblatt, N.S., Beauty R.J., Cronan, A.J. & Ochoa M.A. Relationships among perceptions of parent involvement, time allocation, and demographic characteristics: implication for policy formation. *Journal of community psychology*, 30, pp.519-549, 2002.
- Eccles, J.S. & Harold, R.D. Parent-school involvement during the early adolescent years. *Teachers College Record*, 94, pp.568-587, 1993.
- Epstein, J.L. & Dauber, S. School programs and teachers practices of parent involvement in inner city elementary and middle schools. *The elementary school journal*, 91, pp.279-289, 1991.
- Epstein, J.L. & Sheldon, S.B. Present and accounted for for: Improving student attendance through family and community involvement. *Journal of Educational Research*, 95, pp.308-318, 2002.
- Grolnick, W.S., Benjet, C., Kurowski, C.O., & Apostoleris, N.H. Predictors of parent involvement in children's schooling. *Journal of Educational Psychology*, 89, pp.538-548, 1997.
- Hooper-Dempsey, K.V., Bassler, C.O. & Brissie, S.J. Parental involvement: Contributions of teacher efficacy, school socioeconomic status, and other school characteristics. *American Educational Research Journal*, 24, pp.417-435, 1987.
- Hooper-Dempsey, K.V., & Sandler, H. Why do parents become involved in their children's education? *Review of Educational Research*, 67, pp. 3-42, 1997.

- 石隈利紀『学校心理学——教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』, 誠信書房, 1999.
- 岩永定・芝山明義・橋本洋治・岩城孝次「保護者の学校教育に対する意識と学校関与意欲の関係—小・中学校の保護者調査を通して—」『日本教育経営学会紀要第46号』, 2004, pp.52-64.
- Izzo, V.C., Weissberg, R.P., Kaspro, W.J. & Fendrich, M. A longitudinal assessment of teacher perceptions of parent involvement in children's education and school performance. *American Journal of Community Psychology*, 27(6), pp.817-839, 1999.
- Kohl, O.G., Lengua, J.L. & McMahon, J.R. Parent involvement in school Conceptualizing multiple dimensions and their relations with family and demographic risk factor *Journal of School Psychology* 38, pp.501-523, 2000.
- 小泉令三・江口裕美「転校事態における転校生と母親の新環境適応——母親と面接を通しての検討——」『福岡教育大学紀要』50, pp.173-182, 2001.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, pp.224-253, 1991.
- 内藤哲雄『PAC分析実施法入門「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版, 1997.
- 岡堂哲雄「家族のライフ・コースと発達段階」岡堂哲雄(編)『家族心理学入門』培風館 pp.87, 1992.
- 小倉正義「小学生の保護者の学校への関わり尺度の開発」『心理臨床学研究』24, pp.712-717, 2007.
- 竹森元彦「スクールカウンセリングにおける生徒, 学校, 家庭の支え方について」『心理臨床学研究』18, 2000, pp.313-324.
- 田村節子・石隈利紀「教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開——援助者としての保護者に焦点をあてて——」『教育心理学研究』51, 2003, pp.328-338.
- 田村節子・石隈利紀「保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか—母親の手記の質的分析—」『教育心理学研究』55, 2007, pp.438-450.
- 露口健司「公立学校における保護者セグメントの解析—都市部近郊の小学校を事例として—」『日本教育経営学会紀要』49, 2007, pp.67-82.
- 上村恵津子・石隈利紀「保護者と教師の面接における教師の言語コミュニケーションの分類—ロールプレイ逐語録に基づくカテゴリー構成—」『信州大学教育学部紀要』115, pp.189-197, 2005.
- 上村恵津子・石隈利紀「保護者と教師の面接における教師の言語コミュニケーションの分類Ⅱ—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析—」『信州大学教育学部紀要』117, pp.207-218, 2006.
- 上村恵津子・石隈利紀「保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して—」『教育心理学研究』55, pp.560-572, 2007.
- 上村恵津子・石隈利紀「保護者面談における保護者の連携構築プロセスに関する研究—保護者の発話分析を通して—」『学校心理学研究』8, pp.59-73, 2008.
- Zellman, L.G. & Waterman, M.J. Understanding the impact of parent school involvement on children's educational outcomes. *Journal of Educational Research* 9, pp.370-380, 1998.

Factors Affecting Mother's Involvement in Their Children's Primary Schools

— Development of a psychological hypothesis model using data from interviews of mothers —

OGURA Masayoshi

(Keywords : parent involvement, primary school, psychological hypothesis model)

The importance of school–family partnership is currently well understood. The purpose of the present study was to develop a psychological hypothesis model of mothers' involvement in the primary school of their children. Data from interviews of 7 mothers were analyzed using Personal Attitude Construct (PAC) analysis. On the basis of the result of this PAC analysis and earlier studies, following seven categories of factors affecting a mother's involvement in school were determined: “judgment that the involvement in her children's school is costing or beneficial,” “environment of the mother,” “condition of her children,” “the mother's attitude,” “school climate,” “attitudes of teachers,” and “relationship with other parents.” In conclusion, it was revealed that mothers' motivation, mothers' actual involvement in their children's school, and occurrences of involvement in their children's school were interrelated.